

論文の内容の要旨

論文題目 デイヴィッド・ヒュームの政治学：伝統の継承と発展

氏名 犬塚 元

本論文は、デイヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711-1776) が、彼以前の政治学を継承しながら、なおかつ、それを独自に発展させた政治学を展開したことを解明する。

初期近代ヨーロッパにおける共和主義の系譜が明らかにされたことを受けて、今日、18世紀英国の政治学史は、共和主義の政治学と、それを批判した政治学の対抗の歴史として広く理解されている。ここで、ヒュームは後者の代表として、すなわち商業社会にふさわしい政治学を展開した思想家とされる。しかし、こうした解釈は、ヒュームがマキアヴェッリやハリントンを高く評価し、彼らの政治学を継承しようとしたことを適切に説明できない。共和主義の政治学と、商業社会の政治学の対抗という見取り図は、ヒューム自身のものではなかったのである。ヒュームは政治学の歴史を、政治機構論の政治学と道徳論の政治学という二つの大きな伝統から構成されるとした。前者の政治学、すなわち、人間が利己的存在であることを前提としたうえで政治機構の巧みな整備によって人間の共存を目指す政治機構論の政治学こそ、ヒュームが継承すべきとみなした政治学の伝統であった。

三つの章から構成される第1部は、ヒュームの政治学における古代ギリシア・ローマ世界の意義を究明するものである。すなわち、彼が自らの政治学を展開するにあたって、古代世界における政治経験、ならびに、そうした古代の経験に基づいて構築されてきた政治学の議論を踏まえていたことをまず明らかにする。

第1章は、18世紀英国における古代ローマ史の解釈の諸相を検討する。18世紀の英国においては多くのローマ史解釈が展開されたが、それは、自国をローマ共和政になぞらえる傾向が極めて強かったがゆえであった。ローマの混合政体や党派対立が自国の政治を論じる素材とされたのである。この点において、貴族と平民の対立を高く評価したマキアヴェッリの『リヴィウス論』と、このマキアヴェッリの解釈を批判し、悪しき混合政体ゆえの党派対立がローマを滅したとしたハリントンの『オシアナ共和国』とは、この時代に依然として大きな影響力をもっていた。ウォルター・モイルは、マキアヴェッリとハリントンの解釈の接合を試みた。ボリングブルックは、党派対立ゆえに崩壊したローマの混合政体を、ゲルマン人の国制を起源にもつ党派対立のなき英国の混合政体と対照した。他方、「習俗」の観点からの解釈の典型は、エドワード・モンタギューであった。彼は、「奢侈」によって「習俗」が腐敗したことがローマの党派対立や崩壊の原因であると論じ、これをもって英国の教訓とし

た。

第2章は、ヒュームの古代ローマ論や古代社会論がこうした同時代の議論に対する応答であったことを明らかにする。ヒュームが古代世界に見いだしたのは、商業活動が低調であったことに加えて、やはり激烈な党派対立であった。彼は、ローマの崩壊の原因を「奢侈」とする議論を批判する。崩壊の原因は、一方において征服による版図の拡大であり、他方において不適切な政治機構であるというのが彼の解釈である。ローマ共和政においては、均衡を維持する制度的工夫がなかったがゆえに混合政体は民主政へと変質し、代表制なき民主政が無秩序を招き帝政へと帰着したというのである。

ローマ共和政に混合政体の失敗とともに、激烈な党派対立や民会の暴走を見いだす点において、ヒュームの議論はハリントンと共通した。第3章ではハリントンの政治学との関連を明らかにする。ローマの混合政体の欠陥を回避すべく政治機構を構築したハリントンの『オシアナ共和国』を、ヒュームは「唯一価値のある」政治機構案とみなし、これをもとに「完全な共和国の案」を提示した。ヒュームは、元老院と民会からなる二院制の立法機構を混合政体の中核とみなす点において、ハリントンの議論をそのまま継承する。ヒュームが修正したのは、第一に民会の構成であり、第二に党派対立の位置付けである。ハリントンは党派対立なき「平等な共和国」を目指し、そのために農地法と輪番制を必須の制度としたが、ヒュームはこうした制度を却下する。党派対立の発生を除去することは不可能であり、自由な国家では望ましくもないとみなしたヒュームは、むしろ対立に制度的表現を与え、政治機構のなかに組み込むことを望ましいと考えた。それが「対立者の会議」構想であった。このようにヒュームは、ハリントンの政治学を共和主義の政治学ではなく政治機構論の政治学として理解したうえで、それを継承し独自に発展させたのである。こうした理解は、それを君主政に適用することも可能にした。ヒュームは自らの「完全な共和国」案を提示した後、ここから英国の「制限君主政」の改革案を導き出している。

論文の後半、第2部・第3部は、ヒュームの時代区分における「近代」をめぐる彼の政治学を検討する。主たるテーマは、モンテスキューの政治学との関連である。近代ヨーロッパ世界を代表する政体を穏和な君主政とみなす点において、ヒュームの議論は、同時代を生き彼がその才能を高く評価したモンテスキューと共通する。しかし、古代の共和政と近代の君主政との隔絶を強調し、後者の淵源をゲルマン人の国制に求めるモンテスキューの近代ヨーロッパ理解を、ヒュームは批判した。

第2部が分析するのは、ヒュームの『イングランド史』である。彼は、英国の国制は過去から一貫して混合政体であったとする古来の国制論を批判して、イングランドの歴史を政治社会の二段階の発展史として描く。ここにおいて、ゴシック国制や封建国制は、貴族が王権を抑制する混合政体ではなく、多くの貴族が割拠して実力支配をおこなう社会にすぎなかつ

たと規定される。イングランドにおいて政治権力の一元的支配を確立したのはチューダー絶対王政であり、ここにおいて初めて法規範が一元化された。ヒュームはこの時点をもって、政治社会の発展史の第一段階の達成とみなす。それは、政治社会がその「本質」である「権力」を獲得した状態である。この認識は、統治を生命と財産の保障と捉える自然法学を継承したものであった。他方において、政治社会の第二の発展段階とは、政治社会の「完成」の契機たる「自由」を獲得する過程である。ヒュームは、「権力」と対比した意味におけるこの「自由」を、政治機構において政治権力が分割された混合政体の意味で用いている。「権力」を達成した絶対王政が混合政体へと発展する過程こそ、彼がスチュアート朝に見いだしたものであった。なお、『イングランド史』の歴史叙述の特質は、附録において検討する。

第3部は、『論集』に展開された、近代ヨーロッパ世界をめぐる政治学を検討する。第5章は英国の混合政体をめぐるヒュームの認識を扱う。彼は、『イングランド史』の歴史叙述の見取り図とした「権力」と「自由」の二元論を、混合政体の説明に応用する。彼は、混合政体においては「権力」と「自由」の両契機が制度的に表現されると捉え、この二元的部分の間の緊張と均衡によってこの政体が維持されると理解する。ヒュームは、混合政体の均衡を論じるにあたって、「腐敗」を指弾する道徳論的な政治学が無意味であることを示す。彼の見るところ、英国の混合政体の均衡を維持しているのは、庶民院議員の利己心に訴えかける君主の「影響力」であった。人間の利己心が政治機構のなかでいかに方向付けられているか、ということこそ政治学が着目すべきだというのである。

第6章は、ヒュームが近代ヨーロッパ世界を代表する政体とみなした「文明化された君主政」をめぐる議論を検討する。この政体は、近代ヨーロッパ世界において政治社会の第一段階を達成した君主政である。ヒュームは、マキアヴェッリに依拠しながら「文明化された君主政」とアジア的「専制政」を区分し、両者の相違点を、貴族を中心とした社会階層の存在に求めた。こうした認識はヒュームの政治学をモンテスキューの政治学に接近させるものであったが、両者は貴族の位置付けにおいて意見を異にした。モンテスキューが戦士の徳を称揚し、これを君主政の原理たる「名誉」としたのに対して、ヒュームは自らの歴史認識にもとづいてこうした議論を拒否した。ヒュームもまた貴族の「名誉」を重視したが、それは、宮廷などの社交世界において洗練された行動様式と結びつく限りにおける名誉である。彼が近代ヨーロッパ世界の習俗を描くにあたって排除したのは、封建貴族の精神ばかりではない。キリスト教は来世の栄光を追求するあまり、現世における「名誉」を等閑に付す。従って、世俗の社交空間のなか人間の名誉欲求をもとに形成された道徳規範を破壊する。これがヒュームの判断であった。ここにおいて彼はマキアヴェッリの『リヴィウス論』に指針を求めている。

本論文が解明したのは、ヒュームが、政治学の伝統を引き継ぎながら、それを発展させる

ことを通じて、政治学に新しい貢献をなしたことである。ハリントンの政治学を政治機構論の伝統の一つとみなして継承したヒュームは、党派対立を格納した政治機構を提示することによって、政治対立について新しい視座を提示した。さらに彼は、こうした混合政体論の政治学と自然法学とを接合することによって、「権力」と「自由」を政治社会の二つの構成要素として捉え直し、これに基づいて政治社会の発展史を描き出した。マキアヴェッリの政治学を発展させたものが、「文明化された君主政」論であり、政治社会を支える世俗の行動規範についての議論であった。ヒュームは、自らの政治学を、古代以来の政治学の伝統の延長に確固として位置付けたのである。